

## 『最初の弟子』 (要旨)

### 聖書箇所：マタイ 4:12-22

#### 【1】暗闇を照らす光であるキリスト

バプテスマのヨハネから洗礼を受け、荒野の試みを経た主イエスはガリラヤで宣教を開始されました。偉大なる王の都エルサレムではなく、キリストの到来とは無関係だと期待もされていなかったガリラヤから宣教がスタートしました(参照: マタイ 5:35, ヨハネ 1:46, 7:41)。それは主イエスが「すべての人を照らすそのまことの光」(ヨハネ 1:9)として、暗い世に来てくださったことを示しています(参照: マタイ 4:15-16)。

▷ 「すべての人を照らす」の「すべての人」にあなたも含まれていることをご存知ですか？

#### 【2】最初の弟子

当時のガリラヤ湖はどのような場所だったのでしょうか。ガリラヤ湖の地名をみると「漁師の家」を意味する「ベツサイダ」、「魚の塔」を意味する「マグダラ」と、その地名から漁業が盛んであったことがわかります。ガリラヤ湖周辺は漁場従事者で溢れており、「マグダラ」は干し魚の加工で有名で、それを貯蔵した「塔」から日夜特有の匂いが漂っていたことでしょう。

さて、イエスの最初の弟子になったのは、ガリラヤ湖のほとりで漁をしていたガリラヤ出身のシモン(ペテロ)とアンデレ(18-20)、そして漁の網を繕っていたヤコブとヨハネ(21-22)でした。当時の師弟関係では、弟子が教師(ラビ)を選びました。ところがイエスの場合は師が弟子候補者に声をかけるという手段をとりました。

「湖で網を打っている」者、「船の中で網を繕っていた」者に声がかかったのです。日常の一コマに「わたしについて来なさい」(19)という呼びかけがなされたのでした。この時イエスの弟子になったペテロやアンデレ、ヤコブとヨハネは漁師の身なりでイエスに従いました(22)。

イエスは4人に「人間をとる漁師にしてあげよう」(19)と言われました。それはこれまで魚を相手にしてきた漁師に、今後は人々を相手にする漁師になるのだという約束です。当然彼らには明日の予定がありました。しかし一通りの予定を済ませ、暇ができたので、従うことにしたのではなかったようです。彼らはまずイエスの招きに自分の予定を合わせることにしました。

さて最初の弟子はどのような人々だったのでしょうか？イエスからペテロ(岩)と呼ばれたシモンは、元々「岩」のように落ち着いた人物ではありませんでした。むしろ直情的な性格によって数々の失敗をしました。「雷の子」(マルコ 3:17)というあだ名のヤコブとヨハネは、短気で喧嘩っ早い兄弟で、イエスから叱られることもありましたが(参照: ルカ 9:49-55)。そうした荒削りの弟子たちがイエスの招きに答えたことで成長し、人々をキリストのもとに導く「人間をとる漁師」とされたのです。

#### 【3】イエスの招き

ところで、なぜ当時のユダヤ人の弟子は師事する教師(ラビ)を選んだのでしょうか。それは「求道」のためです。「求道」とは一般的に真理の道を求めて修行することと理解されます。求道者は熱心に真理を追い求め、それに少しでも近づこうと努力します。聖書(福音書)にそうした真摯な求道者が登場します。

本朝の聖書箇所において、イエスご自身が歩き回り、発見し、声をかける…そうした姿を見ることが出来ます。求道者がイエスを見出したのではなく、イエスご自身が求道者を捜して見つけ、声をかけられたのです。

さてマタイの福音書には「わたしについて来なさい」と同じ言葉でイエスが人々を招く箇所があります。その一つが「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(11:28)です。四人の弟子だけでなく、「すべて疲れた人、重荷を負っている人」に「わたしのもとに来なさい」と招いておられるのです。

たとえ私たちが自分の弱さや情けのない失敗を繰り返して落ち込んでいても「すべて疲れた人…」とイエスは招いておられるのです。私たちはその招きの前で取り繕う必要はありません。なぜならイエスは普段着のあなたを招いておられるのですから。

